

総合診療医の増加と周知へ 指導医ら、関で初の講習会

2025年1月29日 05時05分 (1月29日 11時47分更新)



各医療施設で実施している研修プログラムの紹介に耳を傾ける参加者ら＝関市平和通のせきてらすで

診療科の垣根を越えた総合的な診療を担う「総合診療医」（家庭医）を増やそうと、県内で研修プログラムを設ける病院の指導医らが集まる初めての講習会が25日、関市平和通のせきてらすであった。過疎地域などでは、まちのかかりつけ医として幅広い健康問題に対処する総合診療医への期待は高い。専門医の増加と周知を目指し、県内各地の医療関係者が手を組み、動き始めた。（華原土文）

「総合診療医」の制度は2018年、内科や外科と同様に日本専門医機構が定める基本領域として始まった。講習会の発起人で岐阜大学大学院医学研究科総合診療科・総合内科学の森田浩之教授（65）によると、多くの山間、過疎地域を抱える県内では従来の専門医が活躍する機会は少なく「さまざまな病気や地域の健康増進に対応できる総合診療医が必要」という。

総合診療医になるには、大学医学部で6年間学んだ後、医師免許を取得し2年の臨床研修を受けた医師がおよそ3年の研修プログラムを受ける必要がある。県内には6力所の医療機関でプログラムを設けており、現在までに6人の専門医が誕生し、約15人が学んでいるという。県内の大学を卒業した医師が県外の大学で研修を受けるケースもありプログラムの充実や周知が課題となっている。

この日の講習会は県内各地の医療機関から16人が参加した。みどり病院や国保白鳥病院（郡上市）など四つの病院の指導医らが各プログラムの特長や現状を紹介。議論では「社会的認知を上げないと選ばれない」「若い学生や研修医の動機が何か考える必要がある」などの意見が挙がった。

森田教授によると、本来競合関係にある医療機関同士が連携することは珍しく「それほどまでに、どこも人数が少ない」という。3月末までに県内の研修プログラムや総合診療医の情報をまとめたホームページを作成し、25年度以降には情報発信に活用する見通し。森田教授は「共同してセミナーを開くなど、皆が一致団結して専門医を育て、さらに若い人たちにつながるように積極的に宣伝していきたい」と意気込んだ。